

る心之「めかるかはつ」俗に蛙のめかり時とてぬふくなるをいふ
夫木 つとめすとぬもせて夜をあかす身にめかる蛙の心なきとぞ
「めづる」愛し着する心之「めならぶ人」目並人、目前におほくある
人之花がたみめならぶ人などつゝけたり、花がたみは若菜やうの物、
花などつみて入る籠之、籠は目の多くならぶ物なればそれによせて
いへり、

古今 花かたみ目並人のあまたわれは忘られぬらん數ならぬ身は
「めらばせ」めをみあはせて心を通る之「めぎまじき」冷眼とかけ
り、物のおびたしき事はめもすさまじくみる之「めさし」小女を
いふ、又能をもいふと云々「めあはす鹿」是は五月の比照射とて、夏
山のしけみにほくしといふ物に松に火をともしてさして、鹿をまつ
に、其火のひかりに男鹿のよりきて目をみあはすれば、きらくともみ
ゆるをぬらひ弓にて射る、是をめあはす鹿とはいふ之「めもはる

に」めもはるかなる心之、それを木のめのほるによせても云之、

○美の部

「みいもひ」禁中御齋會也、正月に行ると之「みはやす」はやすはもて
はやす之、みてもてはやす之「みにればぬ」我身に相應せぬ之「み
にいたつきのいる」いたつきは煩惱之、みに思ひの付也、一説、矢
の根をいたつきといへば、ろれによせていると云之、

古今 咲花に思ひつくみのあちきなきみにいたつきの入も知すて

「三重の帯」戀に讀り、戀すればみのやせて、一重の帯を、みへにする心
之、

万葉 一重のみ妹か結ひし帯をすらみへにゆふへく我身はなりぬ
「みどりの袖」六位の衣をいふ「みどりの林」緑林白波とて盗人を
いふ、山にすむを緑の林といひ、海にすむを白波といふとなん「みど
のまらばひ」天のうきはしにて、二神陰陽交合ありしをいふ「三

年の後のにひ枕」令の法に、其夫外國にわかれ行て後、其女子あらは五年、子なくんは三年にして、他の人に嫁するをゆるすと云々「みちとせに」なるてふ桃」西王母か桃は三千年に一度みなるといへり、あれより桃には三ちとせの花、みちとせかけて咲桃などつねによみなれたり「道行ぶり」道行ついでこ「道もせ」道の而之、野もせ、庭もせのたぐひこ「道のぬかり」ぬかり泥をいふ、雨ふりこ道のせろになりたるをいふ、

爲尹千首 あせをさす苗代水の程みえて道のぬかりの乾くまもなし

「道知こま」管仲といひし人、雪中にまよひしとき、老馬をばなちて道を得たる古事より讀なれたり「みぬま」水沼之、水あるぬま之、暇方みぬ心によせて戀などに讀り「みるめ」海松とかけり、海にあるみるといふくさなり、暇方みる心によせて、海邊の歌、戀の歌などによめり「みるぶさ」とさなちの髪のぶさやなるをいふ、海松にみたて

いへるまるへし「みるめなきと」近江の湖水をいふ、海松は瀬海ならてはなし、仍湖海はみるめなきさといふ、暇方不見心によせて戀に讀り「みさつめば」我身をつみて人のうへのあはれを知をいふ、俗にみにつまさるといふ、あなし心之「みを知る雨」なみだを云、「みさつくし」海又は入江などの舟のよる所にたて、水の淺深を知木之、暇方身を盡す心によせて戀にも讀り「みわ」御酒をいふ、みわすゑ祈るといふは、神に御酒をすゑて祈る也「みわのしるしの杉」三輪よしるしの杉をよむと、三輪の本織、又 我庵は三輪の山本戀しくはとふらひきませ杉たてる門と云歌より三輪には杉をしるしにして尋る心をあまた讀り「みかきもり」禁中の御垣を守る也、衛門の役之「みかば水」御溝水とかけり、禁中になかるゝみる川之「みかさ」水かさ之、みかさ増を、みかさたかきなど讀り、又古今に、みさふらひみかさともうせと讀る、御笠之「みかくれ」みかくれ、みかくれ

清濁にて心かはれり、みがくれは水にかくるゝ。水草などによめり、
 みかくれ見隠へ、みえつかくれつする。〔みよの佛〕三世の諸佛之
 〔みよりのつばさ〕鷹の右の羽といふ。左をたなききといふ。〔みた
 のみくじ〕西方浄土といふ。〔みたやもり〕神の御田を守る人。
 〔みだり心地〕みだれ心地。〔みそか〕みろとは密事。ひろかなる
 之。〔みそなへ〕神祇に讀り、照覽どかきて、みろなはすと讀り、みろな
 へは照覽し玉へ。みろなはすは照覽ある。〔みそじ餘り二のす
 がた〕佛の三十二相をいふ。〔三の友〕琴詩酒の三。〔三の灯〕稻荷
 に讀り。〔三の玉がき〕同上。〔みつはよつば〕さきくさのみつば
 よつばのどあるに記す。〔みつの道〕三徑とて門井圃の三の道。
 〔みつの世〕過去現世未來の三世。〔三のはじめ〕元日、年月日の
 三のはじめ。〔みつせ川〕三途川をいふ。〔みつわぐむ〕老人の
 くひこしかとまりて三の輪をくみたるやうなれば。〔みつのひ

ろまへ〕神前をいふ。一説瑞廣前と云々。〔水田〕水のある田をいふ。
 〔水のけふり〕水よりいげのたつをいふ。〔水かけ〕水に月日の影、木
 草のかげのうつりたるをいふ。きよし源氏の抄にみえたり。〔水か
 けんた〕一説稻をいふ。一説みそはぎをいふと云々。七夕の歌に天河
 水かけぐさとよめり、又水かけぐさは、水のかげにあるくさ。〔水の
 あや〕水の紋。四方あやを綾になして、水のあやあるなど讀り、波の
 あやといふもあなじ。〔水のみわた〕水三輪田どかけり、水のわたか
 まりてながれず、ふかき所を云、川に讀り。〔水にかすかく〕水に繪
 をかく。法花經喻如畫水といふ。文よりいてたり、物のせんなくはか
 なきこのたどへ。

伊勢物語 行水にかすかくよりもはかなきは思はぬ人を思ふなりけり
 〔みづぶき〕手跡をいふ。〔みづむまや〕水驛どかけり、驛といふは旅
 中にもまやといふ所のしつらひ、食事などすしめてもてなす。鈴鹿

なし原などむかしのむまやの名所之、水むまやといふは湯水各どす
むるばかりにて、食事などのもてなしはなき之、源氏初子卷に、男踏
歌の所に、水むまやにてとそがせ玉ふべきを云々、岷江入楚に云、今
案みつむまやとは男踏歌にいひつたへり、踏歌の人を饗應するにつ
きて、酒或は湯液など用るを水驛と云、とろぎて簡畧する心也、食事等
引つくるひて饗應するを飯驛とも芻驛とも云、踏歌の人のかなたこ
なたへ参るを驛路にたとへて云之と云々、しかればみつむまやとい
ふは本旅のむまやよりいでたる之、それを男踏歌になぞらへてい
るとなん「みつのかしは」歌林良村に云、三角柏とは三葉かしはと
いふ之、いせ大神宮にて三の柏をとりてうらなふ事ありこれをなく
るにたつはかなふた、ぬはかなはぬと、さてたつをとりて袖につ
みてよろあふ之、又日本紀には御綱葉とかけり、延喜式には三綱柏と
かく國史には三角柏とかけり、みつかしは共よめり又水のかしはと

も 讀 り

俊和 神風やみつの柏にとどひてたつをまろてにのしみてろくる
「みなと風」濤に吹風之「みなれ掉」水になれたる棹之、舟いかだな
どに讀り「みなわ」水の池之、みなはさかまくといふは、水の池のう
つにまく之「南にまればみゆる星」老人星をいふ「みなみの
どの」南殿之、紫宸殿をいふ「みらくすくなき」みるとのすくな
き之、らくはろへ字之心なし「みむろのかぐみ」神の寶殿にかけ
たるかぐみ之「みのしろ衣」みの、かはりにきる衣之
後撰 ふる雪のみのしろ衣打きつゝ春きにけりとおどろかれぬる
「みを」水尾とかけり、水のはやくふかき所をいふ、みをはやとも讀り、又
雲のみをかすみのみをといふも、水波にみたて、雲霞のふかき所を
いふ「みくに傳はるのり」三國傳來の佛法之「みくさ」水草之
「みくりなば」池江沼などに生して、つるのゑる浮くさ之「みくさの

たから〕三種の神器をいふ〔宮人の袖つき衣〕結構なる衣を云、
錦織にてつぎたる衣をいふなるべし

万葉 みや人の袖つき衣秋はきに匂ひよろしきたかまどの野そ

〔みや人〕禁中奉公の人をいふ神のみや人は神職の人、

〔都のでぶり〕都の風俗を〔みや木守〕宮をつくる材木を守人、み

やぎ引とは其材木をきりて山より引いたす也〔みやばしらふど

しきたつる〕みやは神社、ふとしきたつるとは、ふとき木にてみ

やはしらをたつるを〔都のつと〕都のみやげ、つとはみやげをい

ふ〔みややび〕風姿、風流、嫉情などかけり、風流なる心なり、又みやびを

かはすなどもいへり、なさをかはす也〔みふゆつぎ〕みふゆは冬

三月のつぎとは冬三月のくるも也〔みふもり〕水籠、水のこもり

たる也、みありぬまなど讀り〔みてぐら〕幣帛をいふ〔みてぐらし

ろ〕神へたてまつる幣帛のものしろをいふなり 〔みあれ〕賀茂

のみあれ祭を云ふ〔みさび江〕みさびは水のさび、水のさびたる江

〔みさを〕操どかけり、又不變ともかけり、松竹によめり、松竹は色かは

らず不變なれば、人の心のみさをともいふ、心のかはらぬ

〔みゆき〕天子は行幸院は御幸といふ、いつれも訓にはみゆきとよむ

へ、行幸といふ心は、天子のいたらせ玉ふ所へには幸ありといふ心

〔みゆきふる〕みゆきは深き雪を〔みしぶ〕水しぶ、水のさひたる

をいふ〔みすのあふひ〕賀茂のみあれのあふひは、髪にもかけ、すだ

れ其外もろくの調度にもかくる

○志の部

〔しばなく〕しばく鳴、しびく鳴心、時鳥、千鳥にはとり、あどによ

めり〔しばく〕しびき心

源氏須磨 山かつの庵にさけるしはくもと、ひさなんこふる里人

〔しばふ〕芝生、芝の生たる所、野へのしばふなどよめり、又雲雀に

しばふのすといふは、芝々さに巢をつくりたる也。「しばわ」しばゐ
して、しばゐする、あど讀り、芝のうへにゐる也。讀方納冷などに讀り
しばたつ波」しばくたつ波也。「しばくる虫」柴をゆひつかねて
高き所より落すに、車のめぐる如くにめぐりておつるを云、又説柴を
つかねてそれのりて山ちをくたるを云。「しばふるひ人」源氏こ
のもかのものしばふるひ人と云々、しばうる人之、又説老人をいふ
「しばむむ」あると心へ世にしばしむむなど云も世なれたる心へ、

源氏物語

綿津見にこゝらしほしむみとなりて猶此岸をを社離れぬ

「しばどけし」しばたれたる也

源氏まかし

寄波のたち重ねたるたひ衣しばどけしとや人のいとはん

「しばかなふ」舟をいだすに瀬時のかなふ也。「塩なれ衣」すまの海

士のしばなれ衣と讀り、鹽になれたる也。「しばのみちひの玉」神

皇后宮新羅をせめ玉ひし時の干珠満珠也、しばみつ玉、しばひの玉と

も讀り、しばしほると

家定卿

夕立は袖もしほのかり衣かつうつりゆく夕立の空

「鹽ならぬうみ」水海をいふ、近江の湖水をいふ。「しどくぬる

」つよくぬる也。「しちのはしかき」むかし男女を思ひかけた

るに、女の曰く、百夜かよふべし、其後あはんどいへりければ、男女のい

ふまゝに夜ごとにかよひて、車の欄にかずをかきて、九十九夜までか

よひて、百夜にみつる夜さはるとありとてあはざりし古事也、此古事

をとりて、俊成卿、臨期變約戀といふ題にて

思ひきやしちのはしかきかきつめて百夜もあなし九ねせんとは

「しりへの園」家の後園也、しるしの嶺、北國にては雪中に棹をたて置

て、雪の淺深を知之。「しる志のすゞ」鷹につくる鈴也。「志ざり」山

に入とて木の枝を折かけて、道のしるしにする也。「鹿のうはげの

星」秋になれば、鹿のけにほしあらはるゝをいふ、夏のはじめつかた

は色さだかならねば、鹿の上毛のくもるほしと讀り「しかのうのふ」天竺の鹿野苑をいふ「しか」如此といふ心、又さうと云心にも用ゐる

古今 みわ山をしかもかくすか春かすみ人にしられぬ花や咲らん
「しかすか」さすかにといふ心、「しかあがら」さうではありなが
ら「しかあふふ」萩をいふ、鹿鳴草とかけり「しかまのかち」は
りまのくよしかまのこほりよりいつるあゐにそめたる布、これを
かぢぞめといふ、又かちぬのとも讀り

同花 播磨なるしかまに染るあなかち人に人を戀ひしと思ひける哉
あればかちをあきかちといひかけたり、此歌などよりあなかちなる
心にあまたよみなれたり「しがらみ」柵とかけり、水のせきどめん
爲にしからみといふ物をかくる、水のしからみ、波のしからみ、井手
のしからみ、などのたぐひ、此外袖のしからみ、風のしからみ、苔のし

からみ、花のしからみ、あどもよめり「しがの山で」説くあれども
白川の瀬のかたはらよりのぼりて如意のみねるに、志賀のかたへ
いつる道、堀川後百首六百番歌合に、春の題にいて、いつれも花を
よめり、仍志賀山越は春に限るよしなれどあしも、四季ともにする
と、なん「鹿のむねわけ」萩の中を鹿の分行也、鹿はむねにて分行
物なればと

禪林寺殿
七百首

をしめどもちりや初なんさは鹿のむね分にす秋萩の花

「しがのてまら」近江の志賀にある女、てまらは女をいふ
拾遺 さゝ波やしかのてこらがまかりにし河瀬の道をみれい悲も
したひもどくる」逢戀によめり、下ゆふひものうちどくるとも

「したの思ひ」心のしたに思ふ、「したのあげさ」同上「したや
すからぬ」水鳥の下やすからぬと讀り、水鳥の水にうかびありくさ
ま、上はやすげなれど、あしもやすめぬ物なれば、下はやすからぬと、説

方戀する人のうへは物思はぬさまなれど、下の心のやすからぬあど
にたとへたり「した紅葉」山の下紅葉、松の下紅葉、など讀り「した
ゆふ紐」したひもに同し「したつ岩ね」いすゝ河したつ岩ね、うごき
なきいはぬなど讀り、大神宮御鎮座の所也

「しづね」下枝之、松に讀り、又山吹のしつねともよめり「しつ心なく」
しつかなる心もなく也「しつけみ」しつかなる也「しつはた」し
づのめのあるはた也、しつはたに思ひみだるゝとは、機糸のおどくお
もひみたるゝなり「しつはた帯」しづのはたをある時腰にまくお
ひをいふ也「まづのおだまき」しづのをうむ時のへるといふ
物之、くりかへすといふまんの詞也、むかしをいまにくりかへすなど
も讀り「しづみ」しつく石、しつく花の色などよめり、しつく石は波
に石のうきしつむをいふ、しつく花の色とは水にうつりたる花のか
けのうきしつむやうなるをいふ、いづれもしづくといふは波にゆら

れてうきしつむ也「しづりの雪」軒ばなどより雪のおつるをいふ
「しあどの風」科戸風とかけり、乾の方の風也「しなてるや」山のか
たさがりなる所をいふとなん、しなてるやかたをか山とつゞけたり
「しあがどりな野」俊賴曰、雄略天皇みな野にかりし玉ひし時、白
鹿のみわりて猪のなかりければ、しながどりな野とは云り、となん
八雲御抄にしながどりは、白猪を云と、猶説あり「しらづくし」八
雲御抄、みをつくし同物と云々「しらくし」しらけたる心也
しらくししらけたるよの庭の面に雪ふみ分てうめの花をる
「しらふのたか」ふの白きたか也、ましらふの鷹とも「しらまゆみ」
まゆみにてつくれる白木の弓也「しらぬひのつくし」つくしの
枕詞也、景行天皇つくしにおはしましけるとき、ある夜ふねにのり玉
ひて、きしにつくとをしらす、はるかに火のみゆる所をみて、御ふねを
つけ玉ふ、名付て火のくにといふ、今の肥前肥後是也、仍しらぬひのつ

くしとはらふと不知火といふ心と「しらねの花」紫蘭と「しらに
 きて」白き幣帛といふ「しらなみ」盗人をいふ山にすむを緑林と
 いひ海にすむを白波といふとらへり「しらす」しるしめすに同じ
 「しらきのくに」新羅國と「しむる」卜領などかけりわが物に領す
 る之心をしむるは心をよすると「しひのまやで」椎の小枝と
 「しひ柴の袖」喪服を云「しのすゝき」しのすゝきはほにいですと
 讀り讀方しのすゝきはほにいでぬ物なれば忍戀などによせてよめ
 り「しのに」しけきとしのに物思ふはしけく物思ふとしのに露ち
 るはしけく露ちる之讀方小笹原などよせて讀り篠のしのによせた
 ると「しのだのもりのちね」和泉のしのだのもりはくすの木一
 本ひろおりて千枝にわかれたりとなんよりてしのたのもりには千
 枝をよみなれたと「しのびづま」しのひてあふ妻と「しのゝめ」
 東雲篠目などかけり曉をいふ「志のびね」郭公によめり五月をお

のか時とゆひ卯月をしのびねといふしのびくに鳴心と「しのゝ
 さふゞき」風の名としげく吹風と「しのゝばふと」一説笹をい
 ふ又小ぐさのこと云々「志のぶもじずり」奥州しのぶの郡に石あ
 り其石の面たひらかにして忍ぶぐさのかたち似るみたれたる紋
 ありろのうへに藍にてもむらさきにてもかけて布にするなりそれ
 を狩衣などにももちめたるよしあり讀方しのぶすりは紋をみたれ
 すりたればみたるゝといふ縁にはおほくしのぶもちすりと讀り又
 戀の歌に思ひみたるゝ心をしのぶすりによせてよめり本歌あり
 古今 陸奥のしのぶもちずり誰ゆゑに亂れんと思ふ我ならなくに
 又しのぶすりにばかぎりなきといふ詞はん有是も本歌と
 伊勢物語 春日野の若紫のすり衣忍ぶのみたれ限しられす
 「しのぶのたか」陸奥のしのぶよりいづる藤也「しくめる」しきる
 古今 知にけん聞てもいとへ世中は波のさはきに風をしくめる

〔しづき〕風の名也、一説志摩の國の海邊の風と云ふ

堀川百 浪のよるいらこか崎を渡る舟はや漕よせよしまきもろする

〔しでうつ〕搦衣のうたに、衣しでうつと讀り、衣をしなくうつなり

〔志でのたをさ〕郭公の異名之、又説ほととぎすは、しでの山よりきて
農をすゝむる鳥といへり、猶説有り〔しきしのぶ〕しまりにしのぶ

なり讀方夜半のさむしろしき忍ぶなどつゝけたり、戀などによめり

〔しきの羽がき〕鴨のおのがはしにて羽をしおくおとのたかき之、數

しげくかくゆゑも數かくとも、百羽がきとも讀り、必あかつきに羽か

く物之、仍しきの羽かきと云は、あかつきになること〔しきしまの國〕

日本をいふ〔しきしまの道〕和歌をいふ〔しきあみ〕しまりによ

する波之〔しめゆふ〕我物に領するをいふ

拾遺 山高み夕日かくれのあさち原後みん爲にしめゆはましを

〔しめはへて〕注進を引之、神祇に詠べし〔しめし野〕あかなつまん

としめし野などいふは、あかなをつまんと我領し置たる野之、此外し
め野、しめし野は領する心によめる歌おほし、又名所にもあり、しめし
野は山城標之野之、しめ野は大和標野之〔しめの内人〕神事をつか
さざる人之〔しみと〕しげき之、露もしみやなどよめり、つゆのしげ
きころなり〔しづがみ〕ちとみてあしき髪之〔しづま〕無言とかけ
り、物いはぬ事之〔霜やたびおく〕霜のたびおく心之、八たび
はたびくの心之、霜やたびおけどかれせぬ柳葉と讀り

〔霜のふりは〕霜のふりさま之〔霜のつる〕鶴は霜にくるしむ物之
よりて霜夜のつる共、霜のつるども云〔霜のたて〕霜のたて露のぬ
きと讀り、露霜を織物のたてぬきにみたてゝいふ之

古今 霜のたて露のぬきころよはからし山の錦をおればかつちる
〔霜のまゆ〕老人のまゆをいふ〔しもよのかね〕しもおく夜にはか
ならずかねの聲さゆるよしおほくよめり〔しもつやみ〕廿日過の

聞をいふ「しもつせ」下の瀬之上の瀬はかみつせといふ

○惠の部

「あぐのわかた」芹をいふ、わかたに用るゑ、あぐのわかた、あぐのわか
だち、あぐつむなど讀り「あじのたくひ」右近衛、左近衛、左衛門、右衛
門、左兵衛、右兵衛、これを六衛府といふ、左衛門は禁中の御垣を守るゑ
まじは左衛門の下につく役人、夜もすがら火をたきて御垣を守る
ゑ、仍あじのたくひと云ふ、「あひあき」酒にあひてくりとなどいひ
て遊をいふ「あらら」歡笑とかけり、わらひたのしむをいふ

○比の部

「ひろまへ」神前をいふ、神のひろまへ、みつのひろまへともいふ
「人のきかくに」人の聞に之「人のくに」こまもろこしをもいひ、又
我本國ならぬ他國をもいふ「人くといとふ鶯」鶯の鳴音、ひとく
くと聞ゆるゑ、うれを人の來るをいとふ心になしていふ、人くく

といとふとも讀り

古今 梅の花みにこそきつれ鶯のひとくくとといとひしもをる

「人がにしめる」人とねてうつりがのとまるを云「人めもる」人め
をまもるゑ、讀方忍戀に讀り、「人めづゝみ」人めをつゝむゑ、讀方人
めつゝみを川の堤によそへて、おもひ川、なみだ河などによせたり

「人わり」人選之、人を撰出を云「人妻」人の妻之、主有人を云「人やりの道」
人にいひつけられて行道之、讀方旅に讀り

古今 人やりの道ならなくに大方はいきうしといひていさ歸きん
是は人にいひつけられて行道ならず我心と行道ろと也 「人やり
ならぬ」人やるにはあらで、我心と行之、讀方旅に讀り、又戀に讀り、是
も人のやるにはあらで、我とわか心の行かよふ心などに讀り
千載戀 世に知らぬ秋の別に打ろへて人やりあらぬ物ろかなしき

「人ふるす里」人のすみふるしたる心之、讀方古郷によめり「人めか

る」かゝるは離の字也、人めのたねたる之「人わらへ」人にわら
はるし之「人だのめ」人にたのみをかけさする之

新古 大あらしきの森のまをもりかねて人頼めなる秋のよの月
新勅 おく山の松のはしのきふる雪は人たのめなる花にろ有ける
これは先の物より人をたのめさすることろ之、まことならぬたのみ
之此外證歌かずくおほし、いつれも此心之、一説に空たのめにおな
しと、此義いかゞそらたのめといふは、たしかならぬとを中づもりに
して、我心にたのむ之「人しづまる」亥の刻を人定といふ、人のぬし
づまる時之「人の秋」人の我をあきたる也、それを秋になしていふ
戀に讀り「人の日」一月七日之、一日鶏、二日犬、三日猪、四日羊、五日牛、
六日馬、七日人、八日穀之、人日に菜羔羹若菜のありを服すれば、万病邪氣
をのぞくと云り「人ごと」人のと葉之、人辞とかけり、人としげきとも
よめり、人になにかといひあつかふと葉のしげきと

拾遺 人とは夏のしくさのしげくとも妹と我としたつさはりなは

「一夜づも」遊女をいふ「一夜めぐりの神」太白星之、天一神ともい
ふ、たすがみとも云ふさかりの神之、此天一神のあるかたには行てや
どらず方違するこ

金葉 君ころは一夜めぐりの神ときけなど我戀のかたゝかふらん
「一夜松」北野の松之、一夜に生いでたるよし之「一夜酒」あまざけを
いふ「一葉の秋」初秋に木の葉の先一葉ちる之「ひとりごと」ひ
とりおと也「ひぢかさ雨」俄雨に笠もとりあへず袖をかづくをい
ふ

六帖 いもか門行過かねてひちかさの雨もふらなん雨かくれせん
「ひちて」袖ひちてなどよめり、いたくぬれたる心之、たいしひちての詞
今は詠べからずとなん「ひるめの神」大日靈尊、天照大神の御事之
いか斗よきあさしてか天照すひるめの神をしはしとよめん

〔ひき〕氷魚、田上川、宇治川などに讀り、冬の物之、あじろと云物をかけて
 とる之、水にしたがひて川下より一度におほくのほる物之、よりにてひ
 どのほる、よるひを、瀬わけのひを、など讀り、又あじろの歌にひをふる、
 ひをつむなどいふは、氷魚を目をふるにかねて云之〔ひをむし〕
 蛭之朝に生して夕に死す、はかなき物之、鐵方無常によせてよめり、
 〔ひきさふる〕ひをさふるならのひろはなど讀り、葉のしげりて日影
 をさゆる之、へたつる心之〔ひかたふく〕風の名之、入雲に、ひつじさ
 るの風也、俊賴抄たつみの風也、籠兼説には、東風の吹やまぬ之と云云、
 〔ひかけのかつら〕ひかけと云草のかつらを頭にかくる也、豊のあか
 りにつくる也〔ひたちおひ〕ひたちのかしま明神の祭の日、女に思
 ひをかけたる男のあまたあるを、布の帯に其名どもをかきつけて神
 前におけばおほき中にすへき男の名かきたるは、自づからひるがへ
 るを、ねぎがとりてとらすれば、るれを聞て男かこちかよりてしたし

となるといひつたへたり、仍戀の歌により、又ひたちおひのかみど
 くつくるは、帯にかこといふ物あり、鈎の字也、又説かことば神事之
 それにいさゝかといふ心をかねたり、かこといふ言葉つねに用る
 はいさゝかの心之、又かおとつけこと也、

新古今 東路の道のはてなるひたち帯のかとと斗りもあはんとぞ思ふ

〔ひたふるよ〕一向に、一むきある心之、鐵方山田のひたふるになど
 つくくるは、田にひたといふ物をかけて鳥をどろかす之、るれによ
 せていふ〔ひたみち〕是も一向の心之、物をまじへず一みちある心
 之〔ひだのたくみ〕大工也、むかし飛彈のくにより上手のいた
 る也、一人の名にあらすすべての名之、

拾遺 とにかくに物は思はずひだくみうつすみきはの只一筋よ
 〔ひつち田〕田をかりたる跡より又生いでたるいねをいふ、ひつちの
 いねとも、山田のひつちとも〔ひつじのあゆみ〕屠所の羊とて、羊

をころさんとして引ゆくに、次第に死地のちかづくを云、ひつじのみか
 みひまのこまなどいふ、いづれも無常のたどへ也〔ひつじのみか
 り〕日次御狩也、毎日鳥をとりて禁中へ奉る也〔ひなのわかれ〕田
 舎へ行わかれ也〔ひさのあがち〕ひなは田舎之ながち長路とい
 なかへ行長たび也〔ひさのあら〕田舎のあれたる野之〔ひさ
 ほりのくじ〕日本をいふ〔ひなつ星〕熒惑星之みなみにすめる
 ひなつほしと讀り〔ひらかのみたか〕出羽のひらかよりいつる
 鷹也〔ひむろ〕ひむろといふは山陰の木すえしけりて、日影のあた
 らぬ所に穴をほり、わらびのほどろをしき、あたり水に水をせきて冬
 のあつ氷を納めおけばいつまでも消ずしてあるを、六月一日にほりい
 せ、禁中へ奉る也、ひむろ山は松か崎のつゝきにあり〔ひのためし〕
 水様と書り、元日に禁中へ氷を奉りて、其氷のあつさうすさにて其年
 の吉凶をしるしめす也、氷のあつきとはし豊年とぞう 〔日のうら

く〕うらくはうらく、日影のどかある也、春之 〔日のぬずみ〕
 光陰のうつり行、月のぬすみといふにしるす〔ひま行駒〕物のひ
 まより駒を引行をみるに、しはしもとまらず過行を、月日はやくす
 き行にたどふ、讀方光陰のうつり行心、又は無常のちかづくとにたど
 へ讀り〔ひまはね〕草をかりたる跡より又生いつるを云〔ひまは
 し〕をたなばたをいふ、めたなばたはありひめといふ 〔ひまのし
 つぐら〕引野は壹岐の國名所之、つぐらは鞭草之、青つぐら、くまつゝ
 らなどいふくさ也 〔ひままゆ〕かひこのまゆをいふ 〔ひじり〕酒
 を云ふ

万葉 酒の名をひしりといひし古のおほきひしりのとのよるしき
 〔ひまりの御代〕聖人のみよ也、日本にては延喜天曆のみよを聖代と
 ほめ奉る也 〔ひじきも〕ひじきといふ海草也、うれをいせ物かたり
 に、ひしきものには袖をしつゝもと云は、引敷物といふにかけて云也、

〔ひもかぐみ〕氷面鏡之氷の面のかしみに似るをいふ、ひとはこほり
之〔ひもろぎ〕神籬とかけり、宗祇曰、神に奉る飯之、又説神祭にはく
ぼてひらてとて柏葉にさして飯菜を入と云々、

○毛の部

〔もろかづら〕あふひのかづら之、賀茂のあれの日、かしらにかくる之
〔もろはらさ〕葉といふ、あふひは二葉なる物なればもろ葉といふ、
〔もろ人〕諸人之もろくの人を云ふ〔もろまゑ〕蛙蟬むしの聲など
に讀り、あほくもろともに鳴心之〔もろや〕矢一手之、二本を一手と
さふ〔もろ神〕もろくの神之〔もろやしろ〕もろくのやしろ
之〔もろましの梅咲みね〕もろましの大度嶺之梅あほき所之、
〔もろぶし〕もろともは、ぶすと〔もろましの歌〕詩をいふ〔もはら〕
もつはらと、

古今 あふこのもはら絶ゆる時にころ人の戀しきとも知ぬれ

〔もにすむし〕われからといふむし之よりて我心から物思ふとな
どによめり〔もにうづもる〕玉がしは〔藻にうづもる〕石を
いふ、玉がしは石之〔もどつ人〕本人之〔もどつ葉〕本草のもど葉
也、つは休也〔もどつか〕本香也、もどのか也〔もどの心〕むかしの
心之〔もどつ色〕白色をいふ、白色爲根本とて、白は色のもど也〔も
とたつ道〕本立道成といふ語よりいふ也〔もどみし人〕むかし
みし人也〔もどこし道〕もど來し道也〔もどくだち行〕もどくだ
り行也、もどくだち行我さかりといふは、よはひのふけたる也、
古今 さくのばに降つむ雪のうれをあもみもどくだち行我盛はも
〔もどめま〕求子といふ舞也〔もどすゑの聲〕神樂にもど歌すゑ歌
とてあり〔もどあらのばき〕もどあらのこ裁とも讀り、もどの葉
もなくあしき也〔もどあらのとくら〕同上〔もどあらの竹〕同
上〔もちひのかぐみ〕かゝみ餅也、もちのますかゝみとも讀り、

〔もち月〕十五日の月也、望月とかけり、十五日には月と日と相のそむに
 よりて、望とはいふ也〔もちつきのまじ〕八月十五日駒迎とて信
 濃國望月牧より、牧の駒を禁中へ引まゐらするを、殿上人官人など相
 坂へむかひいでしうけとる也、八月十五夜なれば月よよせてよむと
 〔もちの日〕十五日をいふ〔もちじほ〕十五日のみちしほと〔もか
 り舟〕漕をかる舟と〔もり玉水〕時を知漏刻のしたるをいふ、
 〔もなく〕もは喪の字、喪はわさはひと讀と、もなくはわさはひなきと、
 伊勢物語 出て行君か爲にとぬきつれば我さへもなく成ぬへき哉
 これは人に衣をぬきてやれば装のなくなるといふを、喪のなきにか
 けていふと〔もなか〕最中とかけり、八月十五夜をもなかの月とい
 ふは、秋の中あればと、又池のもなかよすむ月などいへるも、秋の最中
 を藻中によせていふと〔もらぬいはや〕よしの、笙の颯をいふ、
 〔物から〕物もゑと、又物ながらの心にも用〔もやく〕の關〔出羽の

名所と、ちやむやの關とも、むやくの關共、いなむやの關共、もやくの
 關共いふ、いづれも同し〔もや〕母屋とかけり、本屋と〔もぶしづか
 ぶさ〕もぶしは藻にぶすと、づかぶなは手一束のたけある小關と、
 堀百 丈夫男かもぶしづか關としつけしかひやかしたは氷じに身
 〔もみづる〕紅葉する也〔もみぢぬ〕紅葉せぬ也〔紅葉がり〕紅葉を
 尋る也〔紅葉の淵〕紅葉のおほき所をいふ〔紅葉のとほり〕とば
 りは戸帳と、紅葉の染わたしたるを、とちやうにみたてと云と〔紅葉
 のみふね〕紅葉にてふきかたりたる舟と、紅葉のをふね、紅葉のふね
 とも〔百敷〕禁中を云、百官の座をしくによりてなつくと云云〔もし
 くさ〕百種と、物の色々おほきと、草花などにいふは、百種を百草によ
 せたり、草々おほきと、百くさの花とくさの花共〔もし鳥〕百鳥と〔も
 しちの鳥〕百千の鳥と、數おほき心と〔もしちどり〕古今集、三鳥
 とて三の秘鳥の一と、今不可詠〔もしにの松〕百枝と、伊勢内宮に讀

り、外宮にはいほえの杉をよめり、五百枝も、えの松、いほえの杉、外には詠せず「もよほすり」鶯の百啣と讀り、かすくさえずるこ
 「もずのばやにへ」前生に時鳥は香さし、もずは藍うる翁にてありしが、ほととぎすのくつを買て、其あたひをいたさず、よりて其かはりに時鳥のくる時分には、蛙やうの物を草のくきにさしおきて、時鳥にあたふ、これをばやにへといふ、もずのくさぐきとは蛙やうの物をさし置くさのくき、以上の説語抄物よみはたり「もすのくさぐき」上にみえたり、又もすのくさぐきを尋るとによせていふは、むかし男野を行に女にあひて、此後必あふへし、女の住里はいづくそと問に、女野にもすのくさぐきのあるをさして、我住里はくさぐきのあるかたなりとをしへてさりぬ、明年かの男ありし野に行尋るに、をしへしくさくきもみねは、むなしくかへりし古事より、尋戀に讀り、俊賴抄などにみねたり、

○世の部

「せどの吹わけ」淡路のせどの吹分と讀り、あはちのせどの風と、大島より吹風とめんくりに吹わくるこ「せりつむ」まふくだといふわらはの主人のむすめをすたれおしにみろめて、戀わふる餘りに、芹つむは戀する人のしわざによめり、

千載 いかにせんみかきか原に摘芹のねにのみなけど知人のなき
 「せあ」夫をいふ「せつりもすたも」せつりは國王大臣、すたは奴僕のたくひ、梵語也

いふならくならくのろこに入ぬればせつりもすたも變らさり鳥
 「せんすべあみ」せんかたなきこすへなみはすへきやうなきこ「せみの小川」賀茂川を石川瀬見小川といふよし、長明無名抄にみえたり「せみのば衣」ひとへのうすき衣をいふ、夏の衣に「關の」といふぬみよ、太平の世をいふ、關の戸をもさへず往來のやすきよしこ

り、外宮にはいほえの杉をよめり、五百枝之も、えの松、いほえの杉、外
 には詠せず「もゝさゝらざり」鶯の百啣と讀り、かすくさえずるこ
 「もずのはやにへ」前生に時鳥は香さし、もずは撫うる翁にてありし
 が、ほととぎすのくつを買て、其あたひをいたさず、よりて其かはりに
 時鳥のくる時分には、蛙やうの物を草のくきにさしおきて、時鳥にお
 たふ、これをはやにへといふ、もずのくさぐきとは蛙やうの物をさし
 置くさのくき之、以上の説諸抄物よみねたり「もすのくさぐき」
 上にみえたり、又もすのくさぐきを尋るとによせていふは、むかし男
 野を行に女におひて此後必あふへし、女の住里はいづくそと問に、女
 野にもすのくさぐきのあるをさして、我住里はくさぐきのあるかた
 なりとをしへてさりぬ、明年かの男ありし野に行尋るに、をしへしく
 さくきもみねねは、むなしくかへりし古事より、尋戀に讀り、俊順抄な
 どにみねたり、

○世の部

「せとの吹わけ」淡路のせとの吹分と讀り、あはちのせとの風と、大島
 より吹風とめんくりに吹わくるこ「せりつむ」まふくだといふわ
 らはの主人のむすめをすたれおしにみろめて、戀わふる餘りに、芹つ
 むは戀する人のしわざによめり、
 千載 いかにせんみかきか原に摘芹のねにのみなけと知人のなき
 「せあ」夫をいふ「せつりもすたも」せつりは國王大臣、すたは奴僕
 のたくひ之、梵語也

いふならくならくのろこに入ぬればせつりもすたも變らさり鳥
 「せんすべあみ」せんかたなきえずへなみはすべきやうなきこ「せ
 みの小川」賀茂川を石川瀬見小川といふよし、長明無名抄にみえ
 たり「せみのば衣」ひとへのうすき衣をいふ、夏の衣之「關のどと
 ぬみよ」太平の世をいふ、關の戸をもさゝず往來のやすきよしと

〔關路のとり〕世中さわかしき時は鶏にゆふをつけて、四關にはなつ是を四境の祭といふ、四關はあふさかの關、すくかの關、立田の關、すまの關、關路のゆふつけとりはこれ、されとつねに關に鳥をよむは世のさわがしき心ならで、たゝあかつきつぐる心に讀り、

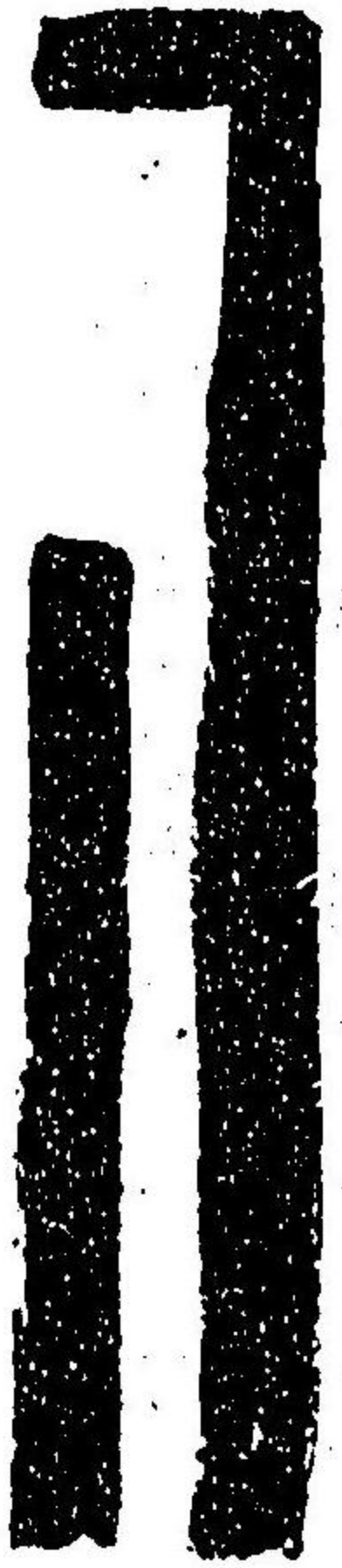
○須の部

〔すばの海氷の上のかよひぢ〕信濃のすばの水海は氷はりぬれば其うへを人かよふ也、狐のわたりをむるをみて人かよふ、狐かへりて後は人かよはずと云云、〔すばの海のみはりのはし〕されも上にしるすどとく、氷の上をかよふをはしとはいふ、〔すへらねはん神〕天照大神をす奉る也、〔すへらぎ〕皇どかけり、天子をす、〔すかのねの長き日〕春の日をいふ、菅は根のなかき物なれば長きといはん、枕詞に、すかのねと云、すがは菅、〔すがのむらどり〕海邊に讀り、多く集とぶ物、〔すだく〕集の字、多あつまる心、む

し、蝻蛙などに讀り、〔すなをなる竹〕竹はゆかみなくすぐなるをいふ、人の心の正直なるによろへてよめり、〔すくせ〕宿世どかけり、前世の宿縁、〔すぐるのすしき〕湖のよのうちくるきをいふ、されは野を焼灰のよの内にもりて黒き、〔すこ〕山田のすこはとよめり、入雲に山田もる者、と云々、下主、〔すさむ〕風すさむと云は風の吹、雨すさむは雨ふる、〔すさめぬ〕不愛どかけり、人もすさめぬなどいふ、あひせぬ心、〔すさみ〕なぐさみ、手すさみ、手なぐさみ、〔すみ山〕須彌山也、〔すきがて〕過がたき、〔すきもの〕投奇者、好色人をいふ、〔すぐる〕不意どかけり、思ひはからざる、と、とるも同し、〔すゞしき道〕極樂の道、〔すゞみどる〕納涼、夕すしみなとする也、〔すくたれ〕すくけたる、〔すゞめ色〕夕をいふ、すしめ色時とも、〔すゞふね〕すまのすし舟など讀り、舟に鈴を付たる、〔すゑつむ花〕紅花を云へに、花は末よりつむ物なれ

はたすきのみはやすくれあふとも讀り。

和歌八重垣終



明治廿二年四月七日印刷出版

五刊發行者

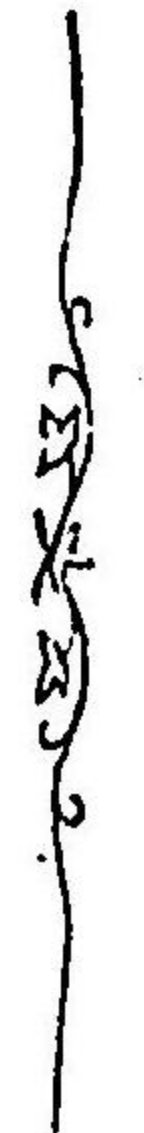
東京京橋區南傳馬町二丁目十番地

辻本九兵衛

日本橋區新右衛門町十番地

印刷者

町田宗七



發賣者

西京三條御幸町

大谷仁兵衛

大坂北久太郎町四丁目

柳原喜兵衛

全本町四丁目

岡島眞七

尾州名古屋鐵砲町

梶田勘助

全

全

全

